

“Djawah”として形成される過程に、分析の中心が置かれている。「家族は個人と彼が所属する文化のかけ橋である」というモチーフは、本書全体の底流となっている。

H. Geertz に依れば、親族を通じて見たジャワ社会の価値体系には、二つの焦点がある。第一は、「敬」(urmat 又は adji) の概念であり、それは、更に三つの意味に分化する。(1)畏 (wedi). (2)恥 (isin), (3) 慎み (sungkan) の三つである。第二は、社会的調和 (rukun) の概念であるが、ここで重要なことは、たとえ見せかけであっても、調和を保つように努める態度である。この二つは、ジャワ社会のあらゆる局面において、望ましい行為基準とされるもので、価値レベルにおけるジャワ社会の背景である。mature Djawah とは、これらの価値が内面化された人格を意味する。

このような人格は、ジャワ家族内において、どのように形成されるのか。この問を、Geertz は、あらゆる角度から分析する。親族の形態、機能の分析も、常に、この問と関連づけられている。

ジャワ家族の形態的特徴は、双系的核家族にあるが(村落では、65%)、同時に妻方に重点が置かれる matri-focal pattern の傾向が強い。特定の親族集団の型はなく、ego. を中心とする近住の親族が、生活の折目折目で共同する。このような分析の内注目に価するものは、matri-focal pattern の傾向とジャワ社会構造の連関、又、婚姻、相続の慣習に関連するイスラム法の浸透度合の分析であろう。意外にイスラム法が軽視されている点が指摘されている。極度に高い離婚率の要因分析も興味深い。いずれも重要な問題であるが、ともすれば、現地資料の不備のために捕え所がなく、又長期の観察を要する上記諸問題に取り組んで、一応の成果を挙げた Geertz 夫人の努力に対し、筆者は、深く敬意を表する。(口羽益生)

Ooi Jin-Bee : Land, People and Economy in Malaya. Longmans, London. 1963. pp. xx + 426

本書は人文地理学者の手によるマラヤ地理の概説書である。もともと東南アジアの諸国のなかで、しっかりした地理学教室をもつ大学はシンガポール大学とマラヤ大学であり、また地理学的研究の最も進んでいる

のはマラヤである。しかし、これまで、まとまったマラヤ地理としては、Ginsburg, Roberts 教授共著の Malaya があったが、ここにイギリスの S.H. Beaver 教授監修の権威ある Geographies for Advanced Study の1冊として、きわめて詳細なマラヤ地誌が出版されたことは、地理学研究からだけでなく、東南アジア研究の立場から慶賀すべきことであろう。

著者 Ooi Jin-Bee 博士は中国系で、マラヤ生まれ、当時シンガポールにあったマラヤ大学をおえて、オックスフォード大学で研究し、現在シンガポール大学の地理学の Senior Lecturer である。このことは、東南アジアの地理も、いよいよ、外国人学者でなくて、現地人の学者でもって書かれるようになったことを示している。地理学研究上の注目すべき発展であろう。

マラヤ地理として、本書は3部からなる。第1部は「土地」であり、地質と地形・気候・植生・土壌をとりあつかう。第2部は「住民」であり、人口パターンの形成・人口分布のパターン・集落のパターンをとりあげる。第3部は「経済」であって、未開人の原始経済・農業経済・家畜飼養漁業林業・鉱業・工業・商業・運輸・問題と展望とにわけられている。

その本の題目どおり、land, people および economy にわたっての comprehensive な研究である。しかも、68図におよぶ地図と図表は、さすがに地理学者だけあって、きれいであり、また要領を得ている。48葉におよぶ写真、また64をかぞえる統計は、本文の理解を助けている。わたくしの知るかぎり、くりかえしているが、はじめてのマラヤ地理である。マラヤ研究のためには、ぜひとも目をとおさなければならないものである。

ただ、叙述の方法はあくまで従来の伝統的な地理学のそれによっている。いいかえると、きわめて常識的な見方が多い。というより、常識的な理解から一步も離れていないという感じが強い。それだけに、なんでも書いてあるが、ともすれば重点的な考察がなく、無味乾燥な叙述が多い。しかも、教科書であることも目的とされたので、余分な叙述が見られる。たとえば、土壌とはなんかとといった定義などあるのは、余分なことのように思われる。その反面、政治過程や経済成長についての分析がほとんどない。あるいはまた人文地理学的に見たマラヤの特質をとらえようともされていない。あまりにも、伝統的地理学だといわざるを得ない。

い。

批判はともあれ、マラヤ研究のための大きな業績であることに間違いがない。(本岡武)

Gullick, J. M.: Malaya. Frederick A. Praeger Pub., N.Y.. 1963. pp. 256

本書は Nations of the Modern World 叢書の一冊として出版されたものである。著者ガーリック氏は英国の人、Taunton School 及びケンブリジで教育を受け、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのレイモンド・フェース及びモーリス・フリードマンなどマラヤに詳しい人類学者の指導も受けている。まず植民地官吏となり、次で今次大戦中軍籍に入ったが、1946 Malayan Civil Service に加って11年間マラヤにあり、マラヤ共産党対策、貿易、農村振興等々に従事した。1957-62 ロンドンでマラヤにゴムのエステイトを持つ人々の Guthrie Group の所長をつとめた。従って純粹の学究活動のみをしているのではないが、Journal of the Royal Asiatic Society 等にも幾篇かの論文を発表している。しかし何よりも注目すべきガーリック氏の論文は Indigeneous Political Systems of Western Malaya, 1958 であって、ロンドン大学経済学部の社会人類学叢書の (Monograph on Social Anthropology) 一冊として出版されている。西部マラヤの村落構造から支配階級、サルタン等に至るまで、その政治的社会的構造を明らかにしたもので、ガーリック氏の学的名声を決定したものと言うことができ、マラヤの社会構造の研究者にとって不可欠の文献と認められている。

マラヤは周知のようにマライ人、中国人、インド人からなる複数社会であり、殊に20世紀に入ってから人口的にも経済的にも著しい発展をとげた。その原因は主としてゴム栽培の導入、錫鉱の開発及び国際貿易港としてのシンガポールの機能によっている。こういう複数的な社会をかかえながら、戦後には独立を獲得し、更には北ボルネオ、サラワクを含めてマライシア聯邦へと発展し、経済的にも安定した国民として形成されて行く姿は東南アジアの国としては驚くべき現象であると言える。ガーリック氏は本書でこの過程に対して統一的な説明を与えようとしているのであって、氏が直接政治や経済にたずさわっていた人であるだけにその説くところにあおなげがない。

本書の半ばを占めるのはマラヤの歴史であって、

1400から1511までのマラッカ王国の歴史にはじまって、現代に及び、これに11章をついやしている。以後の諸章は政治、経済、農村振興、教育、新指導者などを取扱っているが、新聞記事、各種のリポート類がよく利用されている。

本号に紹介されているシンガポール大学の Ooi Jin-Bee の著書がより多く地理的であるに対して、本書はより歴史的、文化的であるが、共にマラヤの現状を理解するために不可欠の文献と思われる。但し1958の「西部マラヤの土着政治組織」の方が学問的香気に於ては遙かに高いように思われる。(棚瀬襄爾)

Newell, William H.: Treacherous River, A Study of Rural Chinese in North Malaya. Univ. of Malaya Press. 1962. pp. xxv + 233

Treacherous River とはマラヤの Province Wellesley の中央部にある川で現在 Sungei Pertama として知られている。本書はその川に沿う潮僑コミュニティの調査報告である。しかし単なるモノグラフではなく、彼らの出身地である広東省の北東部における中国村落やマラヤの他の華僑社会(とくにシンガポールの都市住民や広東人のコミュニティ)との比較を行なって、この報告をより価値あらしめるものとしている。内容は、家族構造、宗教、結社、共同労働、紛争等、極めて社会学的な問題に重点が置かれている。

(1) 調査地が潮僑のコミュニティであること。これは、村人の(少くとも古い世代の)関心が常に中国に向っていることを意味し、又、マラヤにおける華僑一般の農村生活の典型とはなりえないことも示す(方言・出身地・環境・政府の干渉の度合・住民の伝統的価値への志向度などによって同じ中国人コミュニティでも種々のバラエティが生じる)。(2) 一方の方言が他方に通じないということはあっても、中国人社会の一部であるという意識は強い。隣接のマレー人との社会的経済的な接触は殆んどなく、生活様式・宗教などもマレー人から影響を受けることは殆んどない。

(3) 中国に於けると同程度の強固な同族結合や、(経済的単位としての)世帯と村とが密接に結びつくというようなことが予想されるが、実際には、この基本的な結合関係が欠如している(この村の潮僑は、専ら野菜作りを主とし、養豚・養鶏をもして生活している。労働